

京都・滋賀で楽しむ、とびきりクリスマス!

2004年1月1日発行(毎月1日発行)
第9巻第1号通巻100号
平成15年8月21日第3種郵便物認可

創刊100号記念試写会開催! 読者400組 800名にプレゼント

Kyoto Creative Life Magazine

Leaf

[リーフ]

SPECIAL EDITION 2

京都の スイーツ57軒

INTERVIEW

池脇千鶴

エリアファイル

西京極・桂・
嵐山・嵯峨

SPECIAL EDITION

京都・滋賀で楽しむ

クリスマス 大特集!

ホテル、街のレストランのディナーから
プレゼント、イベント、ケーキまで
京都・滋賀のクリスマス情報満載!

January
MONTHLY
400yen

中西美和
季節のお菓子レシピ
モノヲツクルヒト
商店街散歩日和

シェフとお皿の
おいしい関係



Leafホームページ <http://www.leafkyoto.net/>

写真は2.5尺の野点傘。直径は約1.6mあるが、これでも野点傘としては最も小さい。裏千家の野点の屋で使われる「本式」と呼ばれる型で、傘の骨が先まで真っ直ぐで、装飾がないことなどが特色だ。骨が集まる中央の「ろくろ」に骨を挿んで糸を通すまでが下準備。それが終わると、傘を水平に張って、親骨と小骨が接する部分と、外周部分に和紙を張る。この上に和紙を張り、全体に油を引く。

モノヲ ツクル ヒト

京都・若き“職人”たち
Young artisan interview
vol.17
和傘職人

決して派手ではない“職人”という仕事。
その道を選んだ若者たちの姿を伝えていく。

和傘職人
日吉屋・西堀耕太郎さん
(29歳)



僕は、和傘に可能性があったと思った。

視界を覆うほどに大きく放射状に広がる竹の骨と、和紙が描く真円の輪郭。その幾何学的な美しさに思わず息をのむ。目の前で広げられた野点傘は、今まで漠然と心にあった和傘の地味な印象とはまったく違う。傘を開いたときに骨を支える「ろくろ」と呼ばれる部分に多数の骨が集まり、そこからすっと伸びた竹が細やかに交差する。装飾は一切排した形は、端正ですがすがしい。西堀耕太郎さんが日吉屋の店先で、広げられた番傘を目にしたときも、同じような思いだったのかもしれない。「淡いな、竹と紙の質感がいいな、と感じたのを覚えています。そのときは、自分がこの仕事をするとは思っていませんでした。と朗らかに笑う。

外からの視点を持つことで 日本文化や和傘の魅力発見

伝統工芸とはまったく縁のない生活を送っていた西堀さんが、和傘作りの仕事に就いたきっかけは結婚。伴侶に選んだ女性の実家が、たまたま和傘制作を営んでいたのだ。結婚当初は家業など念頭になかった。ところが、長年傘を作ってきた叔父や義母が「後継者がいないから」私の代でもう終わりにしようか」と話すのを聞いて、家業を継ぐことを決意する。

「裏千家の野点傘を作っているのは日本でここだけなのに。うちがやらへんかったら、傘がなくなってしまうわけですから。別に日本文化の喪失とまでは言いませんけど、ちゃんとしたところで使ってもらえるのに、そのまま廃れていくのはどうかなと、一人の日本人としても思っていますね。」

カナダ留学で初めて「日本」を意識したという西堀さんは、日本文化への思いが人一倍強い。「日本人が思っている以上に、外国では日本のものをええものやと尊敬して理解してくれているのに、肝心の日本人は僕も含めて、日本のことを知らない」と痛感した。日本を離れたことで見えてきた日本とい

う国。「日本は文化的にも誇れる、いい国だと僕は思うんですよ。」
一般に日本人が自国の文化に無頓着なのと同じように、京都のすばらしさ、あるいは和傘の良さは、そこに生まれ育った人には意外に見えにくい。「外からの視点」を持つ西堀さんには、和傘の新しい魅力が見えたのだ。

日本全国へ、そして世界へ 和傘を知ってもらいたい

「この仕事を始めた頃、友だちやこの家の人に『大丈夫か?』という言われました。でも、もっといろんな人に新しいやり方で知ってもらったり使ってもらったりしたら、僕は和傘に可能性があると思っただけです。」

制作業のかたわら、日本全国へ和傘を発信するためにインターネットのホームページを開設し、個別の注文にもできる限り対応するように心がけている。また、洋傘や小物が並んでいた店舗を和傘中心に改装した。

「雨傘という形でとけ込むかどうかは分かりませんが、やっぱり日常生活の中で使って欲しいなと思います。基本は伝統の技術と加工法、それを生かして、どう新しいものに挑戦するかです。まず、現代生活に合うように、野点傘よりも小ぶりのディスプレイ用和傘を考案。さらに、海外向けに小さくて華やかな傘を試作して、最近カナダへ出荷したばかりだ。照明のカサ、和風建築の装飾アイテム……新しい試みが次から次へと出てくる。少し早口で快活な口調が小気味いい。

「夢は大きく『世界の日吉屋』なんてね」と照れ笑う西堀さん。その眼前には、和傘の大きな可能性が広がっている。

profile

和歌山県出身。地元の高校を卒業後、カナダ留学を経て、和歌山県内の株式会社で数年勤務。24歳で結婚して京都へ移り、和傘作りの仕事に就く。日吉屋5代目。